



Rejected Story



嘘

---

白い綿菓子のような物が空から降り続く真っ白な世界。

耳鳴りがするほどの静寂が辺りを包み込む。

そんな中を僕は独り前へと進む。

何時終りを迎えるか分からない世界を歩き続けて居た。

頭の中まで真っ白で自分自身が何をしているかも分からないまま、ゆっくりと時間が過ぎて行った

。

ふと、懐かしい声が頭の中に飛び込んできた

「貴方しっかり、何やってるの」

僕はその声に反応するように状態を起こした。

お気に入りのソファでうたた寝をしていたらしい...辺りを見渡しても彼女は居ない。

夢だと理解出来ている。

けれど、今日は4月1日。

「ひっかかったあ」って言って、どこからかあの素敵な笑顔で現れる事を少し期待した。

春の陽射しが眩しくて溢れ出す涙。

もうよそう...

津波によって数百メートルも流されたソファから立ち上がり、僕は瓦礫の街を歩き出す。

前を向いて。